

## 中高年期の夫婦関係と子どもとの関係 2 —孫との交流を中心に—

岩 澤 寿 美 子\*

### Abstract

This paper discussed the questionnaire survey, on 137 middle-aged and elderly couples. The aim of the survey was to examine the correlation of two relationships. One was the relationship between middle-aged and elderly couples, and their children. (The specifications were: 1) expectation and affection for their children 2) degrees of traditional views of the families). The other was the relationship between those couples and their children and grandchildren. (The specifications were: 1) the choice of their closest child, grandchild 2) material and emotional interaction with their children, grandchildren)

The findings are: a) Grandfathers prefer boys than grandmothers as the choice of their closest grandchild, which relates to the fathers choice of the eldest son as heirs. b) The choices are influenced by the traditional views of the families in the group where the view is highly valued. c) Interactions with their child and grandchild differ in gender, and those interactions are also influenced by the educational background, age, and intimacy between the couples. d) Interactions between the couples and their children are influenced by the gender of the child. Whether the couple and the child live together or not also influence those interactions.

**Key Words:** middle-aged and elderly, favorite choice of their child/ grandchild, traditional views of the families, material and emotional interaction

---

\* 高崎保育専門学校

## はじめに

### 問題

近年、人口動態の変化が著しい。わが国の平均寿命は、女性 85.8 歳、男性 79.0 歳と世界でトップである（厚生労働省 2006）。一方合計特殊出生率は、1.32（厚生労働省 既出）で、日本は今、少子長命化時代である。年少人口、生産年齢人口の減少に比して老年人口が増加していく社会の中で、少子化への歯止めのための施策や、晩婚化、社会保障の問題があげられ、論じられている。65 歳以上の人のいる世帯数の推移をみると、三世帯同居世帯が減少し、単独世帯、夫婦のみ世帯、そして、親と未婚の子のみの世帯が増えてきている（厚生労働省 平成 17 年度国民生活基礎調査）。こうした、人口動態的变化は、家族にさまざまな影響をもたらした。

その一つは、子どもが成人した後も、親とかなり大きくなった子との長期にわたる関係である。少子化ゆえに、親と子どもとの関係が子ども数人に分散するのではなく、平均二人という少ない子どもで、より密な関係—例えば、一卵性親子といわれる関係—をつくりうる状況となってきた。それは、未婚の子どもが親と同居し、基礎的生活状況を親に依存しているパラサイト現象（山田, 1999）などに象徴される。これは史上初めての状況であり、家族心理学の非常に新しいテーマといえる。

さらに成人した子どもとの関係だけでなくその子ども、つまり孫との関係が生じた。かつて、祖父母との交流をもち得た子どもは少なかったことを考えると、これは極めて新しい現象といえよう。かくて、ひとりの子どもの親が二人、双方の祖父母が長命化で孫がかなり大きくなるまでのかわりが生じている。祖父母と孫との関係も、家族心理学の新しいテーマとなった。樋口（2006）は、こうした変化に対応する生き方、孫への接し方が祖父母の側に必要であるとしている。

<成人した子どもと親との関係><祖父母と孫との関係>は新しいテーマであり、実証的研究は極めて少ない。こうした研究の現状を踏まえた上で、岩澤・柏木（2006）は以下の 1) - 3) を検証した。本研究はその一連の研究であり、4) と 5) を報告する。

- 1) 中高年期のパートナーとの関係性
- 2) 妻と夫の子どもの好選択性とパートナーとの関係性との関連
- 3) 夫婦の関係性と子への情緒・物などのやりとりや交流との関係
- 4) 祖父母の孫の好選択性と夫婦の関係性との関連
- 5) 夫婦の関係性と孫への情緒・物などのやりとりや交流との関連

## 方法

**分析対象者：**子・孫のいる夫婦

**調査手続き：**郵送により質問紙調査を実施した。夫婦のマッチングをするためあらかじめ夫婦共通のナンバリングをし、妻・夫別々の返信用封筒で回収した。配付数は426組で、妻・夫ともに回答が得られた有効回答は137組（回収率32.6%）である。調査期間は2004年7月から8月である。

(1) パートナーとの関係に関する尺度（20項目）：夫婦のパートナーとの関係を調べるために平山・柏木（2001）の夫婦間コミュニケーション態度項目、平山（1999）の家族ケアに対する態度尺度、高木・柏木（2000）の夫との関係項目と家族の個人化項目を参考に20項目を作成した。各問に対して4件法（「4とてもあてはまる」から「1全くあてはまらない」）で回答を求めた。

(2) <一番近い存在の孫>に関する選択理由：孫の中からひとり「一番近い存在の孫」を選択してもらった。さらにその孫を選んだ理由を、1孫が一人だから、2男の子だから、3初孫だから、4同居しているから、5跡継ぎだから、6気があうから、7頼りになるから、8心配だから、9娘の子どもだから、10一番小さいから、11内孫だから、12女の子だから、13老後の面倒を見てもらうから、14その他、の14の選択肢を設け、複数回答で求めた。

(3) <一番近い存在の孫>とのやりとり（13項目）：選んだくいちばん近い存在の孫>との交流の有無と機能（情緒的・物質的資源交換の頻度）を水野・島谷（2002）を参考に13項目を作成した。この1年間についての交流の頻度を<祖父母から孫へ>4よくあげる～1全くあげない、の4件法と、<祖父母が孫から>4よくもらう～1全くもらわない、の4件法で回答を求めた。

次に交流に関する項目は水野・島谷（既出）の母と娘の交流の尺度を祖父母と孫との関係に移行し、5項目を作成した。この1年間についての頻度を8件法、8ほぼ毎日、73日に1回位、6週に1回位、5月に1回位、43ヶ月に1回位、31年に2回位、21年に1回位、1全くない、で回答を求めた。

(4) 子どもとの関係に関する尺度（26項目）：子どもの中からひとり「一番近い存在の子ども」を選択させた。その子どもとの関係について、高木・柏木（既出）の娘に対する期待・感情、菅野・田矢・柏木（2003）の子ども・子育てへの感情尺度、秋山（2002）の現代夫婦の性別役割分業観を参考に26項目を作成した。各問に対して4件法（「4とてもあてはまる」～「1全くあてはまらない」）で回答を求めた。

## 結果と考察

1. 分析対象者 分析対象者の社会経済的属性は表1、表2の通りである。

さらに、妻と夫の最終学歴と年齢3群とをクロスしてみると、妻では、高卒群、短大卒群、中卒群、大学・院卒群の順に多い。妻の短大卒群、大学・院卒群の人数は年齢低群の方が年齢

表1 分析対象者の属性

|        | 妻                              |           | 夫                              |           |
|--------|--------------------------------|-----------|--------------------------------|-----------|
| 年齢     | 64.9歳<br>(SD6.71 NA1 範囲51-82歳) |           | 68.5歳<br>(SD7.57 NA2 範囲57-87歳) |           |
| 年齢低群   | 51-60歳                         | 43名 31.4% | 57-65歳                         | 40名 29.2% |
| 年齢中群   | 61-67歳                         | 46名 33.6% | 66-72歳                         | 50名 36.5% |
| 年齢高群   | 68-82歳                         | 47名 31.4% | 72-87歳                         | 45名 32.8% |
| 学歴     | NA3                            |           | NA5                            |           |
| 中卒群    | 19名                            | 13.9%     | 17名                            | 12.4%     |
| 高卒群    | 70名                            | 51.1%     | 45名                            | 32.8%     |
| 短大卒群   | 30名                            | 21.9%     | 12名                            | 8.8%      |
| 大学・院卒群 | 15名                            | 10.9%     | 58名                            | 42.3%     |
| 仕事     | NA17                           |           | NA10                           |           |
| 有職     | 42名                            | 30.7%     | 73名                            | 53.3%     |
| 無職     | 78名                            | 56.9%     | 54名                            | 39.4%     |

表2 妻の属性

| ライフスタイル | 5群    | 有職・無職 | 3群 | 働き方 | 3群     |     |
|---------|-------|-------|----|-----|--------|-----|
| 現役      | 継続    | 17名   | 現役 | 42名 | 継続群    | 27名 |
| 退職      | 継続    | 10名   | 退職 | 42名 |        |     |
| 現役      | 育児期中断 | 25名   | 無職 | 36名 | 育児期中断群 | 57名 |
| 退職      | 育児期中断 | 32名   |    |     |        |     |
| 未就労     |       | 36名   |    |     | 未就労    | 36名 |

高群より多い。他方、夫では大学・院卒、高卒、中卒、短大卒の順で多い。一般に言われているように、きょうだいが多い中で、教育が受けられるのはまず、男子からで、女は家庭に入るのだから、短大ぐらいでちょうどいい、といった考え方がここにも表れている。

## 2. 孫との関係

### (1) 「一番近い存在の孫」の選択理由

子どもとの関係において「一番近い存在の子ども」の選択理由として「長男だから」「跡継ぎだから」が、夫のほうが妻より有意に多かった(岩澤・柏木 既出)。夫の“伝統的な家族観”が、妻よりも子どもの好選択性に関係しているといえるのではないだろうか。

では、孫との関係において「一番近い存在の孫」の選択理由はどうか。分析対象者の中からまず、ひとりっ子7組を除いた男女双方の子どもがいる妻と夫69組から、さらに孫が一人しかいない13組を除いた妻と夫56組の祖母(妻)と祖父(夫)を対象に、それぞれにとって、「一番近い存在の孫」を選んでもらった。孫の属性-孫の人数については、祖母(妻)の回答と祖父(夫)の回答がすべて一致していない。祖父(夫)の回答の方に欠損値が多かったため、ここでは祖母(妻)の回答から、孫の属性を出した。祖母(妻)ひとりに孫が平均2.94人(SD1.72 NA5)である。

祖母(妻)は男子30名(53.6%)、女子23名(41.1%)を「一番近い存在の孫」として選び、祖父(夫)も男子30名(53.6%)、女子23名(41.1%)の孫を「一番近い存在の孫」と

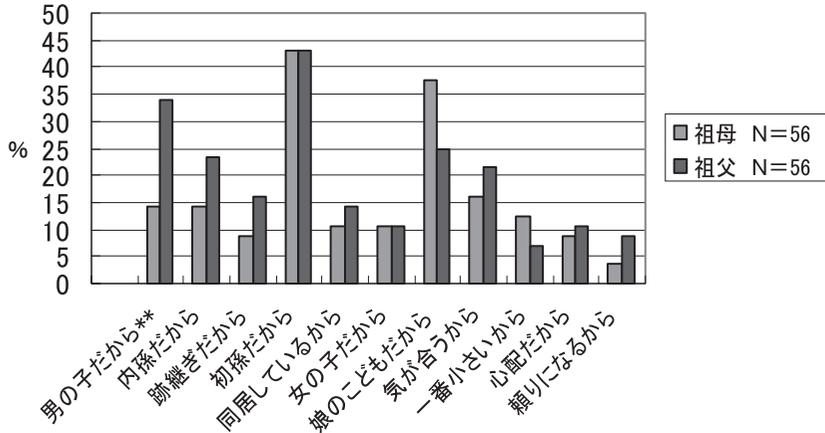


図1 「一番近い存在の孫」の選択理由

\*\*p < 0.01

して選んでおり、選んだ孫の男女の人数は同じであった。祖母（妻）が選んだ「一番近い存在の孫」の平均年齢は 10.04 歳 (SD6.41)，祖父（夫）が選んだ「一番近い存在の孫」の平均年齢は 9.81 歳 (SD6.51) である。

それでは、祖母（妻）と祖父（夫）はどういった理由で「一番近い存在の孫」を選んでいるのであろうか。図 1 にその結果を示した。祖母（妻）の「一番近い存在の孫」の選択理由として多いのは、「初孫だから」「娘の子どもだから」「気が合うから」の順であった。祖父（夫）に多かったのは、「初孫だから」「男の子だから」「娘の子どもだから」の順であった。「男の子だから」は祖父（夫）のほうが祖母（妻）より多かった ( $t = 2.66$   $p < 0.1$ )。他方、有意差は見られなかったが、「娘の子どもだから」は、祖母（妻）が祖父（夫）より割合が高かった。

その点をさらに検討するために、子どもや孫の好選択性を、伝統的家族観の視点から分析していく。

### 3. 子どもとの関係

#### (1) 伝統的家族観

子どもとの関係に関する項目に関して因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い，最も解釈可能性の高い 3 因子を抽出し，その結果を表 3 に表した（負荷量 4.0 以下は除外）。

第 1 因子は「いざという時には子どもが頼りである」「子どもは相談相手として頼りになる」などの子どもへの依存や期待を示す 7 項目からなり「子への期待」と命名した。第 2 因子は「長男が家を継ぎ，お墓などの世話をするのがよい」「老後は子どもと同居するのがよい」などの伝統的家族観を示す 7 項目からなり「伝統的家族観」と命名した。第 3 因子は「子育ての時期を楽しんだ」「子育てで自分自身も成長できた」など自分の子育てを肯定的に捉えた感情を

表3 子どもとの関係に関する項目 累積説明率 38.0 %

| 項 目                           | F1         | F2         | F3         |
|-------------------------------|------------|------------|------------|
| <b>&lt;第1因子：子への期待&gt;</b>     |            |            |            |
| いざという時には子どもが頼りである             | <b>.71</b> | .43        | .12        |
| 子どもは相談相手として頼りになる              | <b>.70</b> | .20        | .46        |
| 子どもがいると年をとった時安心である            | <b>.68</b> | .63        | .10        |
| 子どもとはとても気が合う                  | <b>.62</b> | .10        | .48        |
| 子どもは生きがいである                   | <b>.57</b> | .45        | .25        |
| 妻より子どもとのほうが会話が楽しい             | <b>.53</b> | .19        | .19        |
| 子どもの家庭のことを親として分っているほうだ        | <b>.45</b> | .31        | .30        |
| <b>&lt;第2因子：伝統的家族観&gt;</b>    |            |            |            |
| 長男が家を継ぎ、お墓などの世話をするのがよい        | .27        | <b>.65</b> | -.07       |
| 老後は子どもと同居するのがよい               | .51        | <b>.64</b> | -.18       |
| 父親が仕事のために家族との約束が守れないのは仕方がない   | .21        | <b>.51</b> | -.15       |
| 子どもが3歳くらいになるまで母親は育児に専念すべきである  | .20        | <b>.49</b> | .08        |
| 母親が夫、子ども優先になるのは仕方がない          | .33        | <b>.47</b> | -.09       |
| 結婚するまでは、子どもは親元で暮らすのがよい        | .38        | <b>.47</b> | .07        |
| 結婚した娘は嫁ぎ先の家の人間だ               | .10        | <b>.46</b> | -.02       |
| <b>&lt;第3因子：子育てへの肯定感情&gt;</b> |            |            |            |
| 子育ての時期を楽しんだ                   | .25        | -.02       | <b>.68</b> |
| 子育てで自分自身も成長できた                | .33        | .03        | <b>.67</b> |
| 子どもとはお互いにひとりの人間として対等な関係である    | .41        | -.13       | <b>.45</b> |
| 自分の子育てはうまくいった                 | .40        | .15        | <b>.40</b> |
| $\alpha$ 係数                   | <b>.81</b> | <b>.73</b> | <b>.65</b> |

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表4 子どもとの関係3因子のt検定

| 性差 | 子への期待 |             |      |             |     | 伝統的家族観 |      |      |      |      | 子育てへの肯定感情 |             |      |             |     |
|----|-------|-------------|------|-------------|-----|--------|------|------|------|------|-----------|-------------|------|-------------|-----|
|    | N     | 平均          | SD   | t値          | sig | N      | 平均   | SD   | t値   | sig  | N         | 平均          | SD   | t値          | sig |
| 妻  | 99    | <b>2.97</b> | 0.49 | <b>4.59</b> | *** | 110    | 2.85 | 0.49 | 1.55 | n.s. | 112       | <b>3.20</b> | 0.43 | <b>5.38</b> | *** |
| 夫  |       | <b>2.71</b> | 0.62 |             |     |        | 2.93 | 0.55 |      |      |           | <b>2.92</b> | 0.53 |             |     |

\*\*\* p < .001

示している4項目からなり「子育てへの肯定感情」と命名した。

子どもとの関係の3因子「子への期待」「伝統的家族観」「子育てへの肯定感」の性(妻・夫)についてt検定した結果は表4のとおりである。

「子への期待」「子育てへの肯定感情」は、妻の方が夫よりも有意に高い。このことは、育児期の父親、母親ともに育児への肯定感が高い(柏木・若松 1994)結果と一見矛盾しているように見える。しかし、子育て真っ最中に子どもの世話に追われ、否定感が父親よりも強い母親が、子育てをゆっくり振り返る世代となった本研究対象者には、否定感も含めた自分の子育てが、父親よりも強く自身の達成感や良き思い出になっているのではないかと考えられる。

「伝統的家族観」の因子には妻と夫の性差はみられなかった。では「伝統的家族観」には、どのような特徴があるのだろうか。そこで、年齢・学歴・ライフスタイルについて分散分析を行った。その結果、妻には、年齢・学歴・ライフスタイルによる差がみられなかったが、夫は年齢高群のほうが年齢低群よりも有意に得点が高い ( $F(2,117) = 4.60p < .01$ )。つまり、高年齢群の夫に伝統的家族観が強くみられた。夫は、学歴、職業の有無では差はみられなかった。

#### 4. 好選択理由

##### (1) 伝統的家族観と「一番近い存在の子ども」の選択理由

「伝統的家族観」と「一番近い存在の子ども」「一番近い存在の孫」の選択理由との関連をみてみよう。

まず、「伝統的家族観」の因子で、妻、夫それぞれを3群に分け得点の高い群から順に「伝統的家族観高群」「伝統的家族観中群」「伝統的家族観低群」とした。ここでは「伝統的家族観高群」と「伝統的家族観低群」の2群で分析し「一番近い存在の子ども」の選択理由をしてみる(56人中)。各群の人数が少ない為、有意な差があるかどうかの検定はできなかったが、低群と高群で人数に20%以上の差がある6項目の理由を表5に示した。

表5をみてみよう。「長男だから」「跡継ぎだから」は妻・夫ともに伝統的家族観の高群のほうが低群よりも多い割合を示している。「同居しているから」「孫がいるから」は夫の高群が低群よりも多い割合を示し、「老後の面倒を見てもらうから」は妻の高群が低群よりも多い割合を示している。「頼りになるから」は妻では高群が低群よりも多いのに対して、夫では低群が高群よりも多い傾向がみられた。

表5 伝統的家族観の低群と高群との「一番近い存在の子ども」の好選択理由の比較(%)

|               | 伝統的家族観(妻) |             | 伝統的家族観(夫)   |             |
|---------------|-----------|-------------|-------------|-------------|
|               | 低群(17人)   | 高群(12人)     | 低群(13人)     | 高群(16人)     |
| 長男だから         | 17.6      | <b>50.0</b> | 53.8        | <b>75.0</b> |
| 跡継ぎだから        | 5.9       | <b>25.0</b> | 23.1        | <b>56.3</b> |
| 頼りになるから       | 17.6      | <b>58.3</b> | <b>58.3</b> | 31.3        |
| 同居しているから      | —         | —           | 0.0         | <b>25.0</b> |
| 孫がいるから        | —         | —           | 0.0         | <b>31.3</b> |
| 老後の面倒を見てもらうから | 5.9       | <b>50.0</b> | —           | —           |

##### (2) 伝統的家族観と「一番近い存在の孫」の選択理由

では次に「一番近い存在の孫」の選択理由を「伝統的家族観高群」と「伝統的家族観低群」の2群(56人中)で比較してみよう。「一番近い存在の子ども」同様、高群と低群とで人数に20%以上の差がある理由2項目を表6に示した。

「跡継ぎだから」は祖母(妻)、祖父(夫)ともに高群が低群より割合が多かった。「男の子だから」は祖父(夫)の高群が低群よりも多い。

表6 伝統的家族観の低群と高群との「一番近い存在の孫」の好選択理由の比較 (%)

|        | 伝統的家族観 (祖母・妻) |             | 伝統的家族観 (祖父・夫) |             |
|--------|---------------|-------------|---------------|-------------|
|        | 低群 (17人)      | 高群 (12人)    | 低群 (13人)      | 高群 (16人)    |
| 跡継ぎだから | 0.0           | <b>25.0</b> | 0.0           | <b>25.0</b> |
| 男の子だから | —             | —           | 23.1          | <b>50.0</b> |

伝統的家族観の得点が高い群が低い群よりも、一番近い存在の子どもの選択の理由として「長男」「跡継ぎ」「老後の面倒」といった項目を選択している割合が多い。そして、孫の好選択にも伝統的家族観が基底にあり、選択理由が世代でつながっていく傾向が見てとれた。

妻と夫の性差という点で、一番近い存在の子どもの選択理由に夫が妻よりも伝統的家族観が強調されており(岩澤・柏木 2006)、一番近い存在の孫の選択理由にも子どもの選択理由ほどではないが、祖父(夫)が祖母(妻)よりも伝統的家族観を意識した選択理由をあげていることも示された。しかし、祖母(妻)においても、伝統的家族観が高ければやはり一番近い存在の子どもや孫の選択理由に伝統的家族観が強調される割合が伝統的家族観の低い祖母(妻)よりも高い。

### 5. 孫との交流

孫との関係を情緒的・物質的交流や、やりとりの視点からみてみよう。

孫との情緒的・物質的資源交換に関する13項目に関して因子分析(最尤法, varimax法)を行い3因子を抽出した。その結果は表7のとおりである。第1因子は、「あなたが病気やけ

表7 孫との情緒的・物質的交流 累積説明率 52.58 %

| 項 目                              | F1          | F2          | F3          |
|----------------------------------|-------------|-------------|-------------|
| <b>&lt;第1要因：孫から情緒・品物をもらう&gt;</b> |             |             |             |
| あなたが病気やけがの時の看病を孫にしてもらう           | <b>0.79</b> | 0.21        | -0.05       |
| あなたが孫から身近なことについてのアドバイスをもらう       | <b>0.73</b> | 0.16        | 0.06        |
| あなたが日常の、こまごまとした用事の手伝いを孫にもらう      | <b>0.69</b> | 0.17        | 0.07        |
| あなたが孫から食べ物や普段着など、生活に密着したものをもらう   | <b>0.65</b> | -0.01       | 0.27        |
| 孫から誕生日やその他の記念日のプレゼントをもらう         | <b>0.61</b> | -0.04       | 0.35        |
| あなたが困った時やつらい時、孫と一緒にいてもらう         | <b>0.56</b> | 0.41        | 0.13        |
| <b>&lt;第2要因：孫に情緒を与える&gt;</b>     |             |             |             |
| 孫が病気やけがの時の看病をあなたがしてあげる           | 0.08        | <b>0.86</b> | 0.08        |
| 孫が困った時やつらい時、あなたが一緒にいてあげる         | 0.24        | <b>0.74</b> | 0.18        |
| 孫に日常の、こまごまとした用事の手伝いをしてあげる        | 0.04        | <b>0.70</b> | 0.15        |
| 孫に身近なことについてのアドバイスをあげる            | 0.29        | <b>0.59</b> | 0.30        |
| <b>&lt;第3要因：孫に金品を与える&gt;</b>     |             |             |             |
| 孫に誕生日やその他の記念日のプレゼントをあげる          | 0.11        | 0.19        | <b>0.66</b> |
| 孫に食べ物や普段着など、生活に密着したものをあげる        | 0.04        | 0.41        | <b>0.51</b> |
| 節目(入学等)でのまとまったお祝い金をあげる           | 0.13        | 0.10        | <b>0.51</b> |
| $\alpha$ 係数                      | <b>0.82</b> | <b>0.82</b> | <b>0.62</b> |

がの時の看病を孫にしてもらおう」「あなたが日常の、こまごまとした用事の手伝いを孫にしてもらおう」「孫から食べ物や普段着など生活に密着したものをもらおう」を含む6項目からなり、情緒や物を孫からもらうことを示すので「孫から情緒・品物をもらおう」と命名した。第2因子は「孫が病気やけがの時の看病をあなたがしてあげる」「孫が困った時やつらい時、あなたが一緒にいてあげる」を含む4項目からなり、孫に情緒的交流をあげることを示すので「孫に情緒を与える」と命名した。第3因子は「孫に誕生日やその他の記念日のプレゼントをあげる」「節目（入学等）でのまとまったお祝い金をあげる」を含む3項目からなり、孫に品物や金銭をあげることを示すので「孫に金品を与える」と命名した。

孫との交流に関する5項目に関しても因子分析（最尤法，varimax法）を行い2因子を抽出した。その結果は表8の通りである。子どもとの交流理由と同様、第1因子を「孫とのコミュニケーション」、第2因子を「孫との共行動」と命名した。

孫との情緒的・物質的資源交換に関する「孫から情緒・品物をもらおう」「孫から情緒・品物をもらおう」「孫に金品を与える」の3因子、さらに交流に関する「孫とのコミュニケーション」と「孫との共行動」の2因子の得点を祖母（妻）と祖父（夫）ごとにt検定をおこなった結果を示したのが表9である。

表8 孫との交流 累積説明率 51.10 %

| 項目                  | F1          | F2          |
|---------------------|-------------|-------------|
| ＜第1要因：孫とのコミュニケーション＞ |             |             |
| 孫に郵便やFAXを送る         | <b>0.71</b> | -0.07       |
| 孫と電話で話す             | <b>0.60</b> | 0.17        |
| 孫にメールを送る            | <b>0.56</b> | -0.09       |
| ＜第2要因：孫との共行動＞       |             |             |
| 孫と買い物、遊びなどで一緒に出かける  | 0.28        | <b>0.96</b> |
| 孫に会う                | -0.31       | <b>0.50</b> |
| $\alpha$ 係数         | <b>0.59</b> | <b>0.59</b> |

表9 孫との情緒的・物質的資源交換と交流の得点 (t検定)

| 項目 (N)            | 平均     | SD   | t/sig   |
|-------------------|--------|------|---------|
| 孫から情緒・物をもらう (70)  | 祖母 (妻) | 1.69 | 2.591*  |
|                   | 祖父 (夫) | 1.50 |         |
| 孫に情緒を与える (86)     | 祖母 (妻) | 2.78 | 7.48*** |
|                   | 祖父 (夫) | 2.06 |         |
| 孫に金品を与える (102)    | 祖母 (妻) | 3.51 | 5.71*** |
|                   | 祖父 (夫) | 3.08 |         |
| 孫とのコミュニケーション (72) | 祖母 (妻) | 2.99 | 2.05*   |
|                   | 祖父 (夫) | 2.63 |         |
| 孫との共行動 (100)      | 祖母 (妻) | 5.89 | 2.682** |
|                   | 祖父 (夫) | 5.55 |         |

\* p < 0.05      \*\*p < 0.01      \*\*\*p < 0.001

5つの因子全てにおいて祖母(妻)と祖父(夫)との有意差がみられた。どの因子も祖母(妻)が祖父(夫)よりも有意に高い。孫への金品のプレゼントは祖母(妻)が主体になっていることが推測できる。

さらに詳しく、年齢、学歴、仕事についてみてみよう。祖母(妻)の年齢3群で分散分析を行った結果、「孫から情緒・品物をもらう」は低年齢群(M = 1.48 (.59) N = 35)が中年年齢群(M = 1.81 (.72) N = 29)、高年齢群(M = 2.01 (.73) N = 26)よりも有意に低かった(F(2,87) = 4.79 p < 0.05)。「孫に情緒を与える」は、低年齢群(M = 3.03 (.71) N = 37)が中年年齢群(M = 2.67 (.84) N = 36)、高年齢群(M = 2.65 (.80) N = 34)よりも高い傾向が見られた(F(2,104) = 2.70 p < 0.10)。

祖母(妻)の年齢が低いということは、孫の年齢も低く、その結果、孫から情緒・品物をもらうことは少なく、むしろ、孫に情緒を与える、世話をする立場にあるということが考えられる。祖父(夫)では年齢による差はなかった。祖母(妻)の学歴3群で分散分析をした結果は表10のとおりである。

「孫に情緒を与える」では、中卒群が高卒群、大学・院卒群よりも有意に低く、短大卒群が高卒群、大学・院卒群より有意に低い。「孫に金品を与える」は、中卒群が高卒群、短大卒群、大学・院卒群より有意に低い。「孫とのコミュニケーション」「孫との共行動」に有意差はみられなかった。

祖父(夫)の学歴3群で分散分析した結果、「孫に金品を与える」で、中卒群(M = 2.59 (.76) N = 13)が高卒群(M = 3.25 (.69) N = 40)、短大卒群(M = 3.00 (.67) N = 10)、大学・院卒群(M = 3.15 (.83) N = 47)よりも低い傾向があった(F(3,106) = 2.67p < 0.10)。

中卒群に高齢群が多く、孫の年齢も高いことが、孫に情緒を与える因子の低さにつながっているのではないだろうか。

祖母(妻)の現在働いている、働いていない、未就労の3群や働き方(継続型、育児中断型、未就労型)3群の差はなく、祖父(夫)の年齢3群、職業の有無の差もみられない。

子どもとの交流・やりとりについてはどうであろうか。岩澤・柏木(2006)では、妻の

表10 孫との情緒的・物質的資源交換と学歴の多重比較(祖母(妻))

|             |        | 1中卒群     | 2高卒群     | 3短大卒群    | 4大学・院卒群  | F値/多重比較                      |
|-------------|--------|----------|----------|----------|----------|------------------------------|
| 孫から情緒・物をもらう | 平均(度数) | 1.73(8)  | 1.77(43) | 1.65(25) | 1.72(13) | 0.15                         |
|             | 標準偏差   | 0.57     | 0.70     | 0.69     | 0.83     |                              |
| 孫に情緒を与える    | 平均(度数) | 2.23(13) | 2.90(52) | 2.54(27) | 3.23(15) | 5.66**<br>1<2,4** 3<2* 3<4** |
|             | 標準偏差   | 0.83     | 0.76     | 0.71     | 0.65     |                              |
| 孫に金品を与える    | 平均(度数) | 3.14(14) | 3.50(59) | 3.64(29) | 3.51(15) | 3.71*<br>1<2,3** 1<4*        |
|             | 標準偏差   | 0.47     | 0.38     | 0.39     | 0.79     |                              |

+p < 0.10 \*p < 0.05 \*\*p < 0.01 多重比較欄の数字は各群数字を示す

「子どもとのコミュニケーション」は年齢高群が、年齢低群や年齢中群よりもコミュニケーションが少なかった。夫は年齢高群が年齢中群よりも「子どもとのコミュニケーション」が少ない傾向があった。

学歴での差をみると、妻は「日常的な情緒や物のやりとり」「子への経済的援助」「子とのコミュニケーション」で大卒・院卒群が中卒群、高卒群、短大卒群よりも多かった。大卒・院卒群の妻が経済的に安定していることが子どもとのやりとりを多くしていると思われる。夫の学歴では「子どもからの経済的援助」に差がみられた。中卒群は、短大卒群、大学・院卒群よりも高い。中卒群の夫が高齢であることや収入が少ないことが考えられ、そのことが子どもからの援助を受けることの背景にある。

妻のライフスタイルでは、「子からの経済的援助」で、現役の継続群が他の4群よりも多かった。これは夫とは、対照的であり、妻の場合は、子からの援助が“援助”というより、親からの援助に対する、お返し援助、おねだり援助の意味合いがあり、やりとりを楽しむ姿が浮かんでくる。

こうして、孫と子のやりとりや交流を全体的に比較してみると、年齢、学歴、ライフスタイルによる差が子どもとのほうが孫とのやりとりや交流よりも多い。子どもとの関係は、親と子という直接的なつながりだが、孫との関係には、“孫の親”のワンクッションがあることが、祖母（妻）や祖父（夫）の属性の関与を子どもよりも少なくしている。しかし、決して、無視できるものではなく、祖母（妻）や祖父（夫）の生活が孫との関係にも関与していることがわかる。

## 6. パートナーとの関係

### (1) パートナーとの関係の構造

まず、パートナーとの関係がどのような構造からなっているかをみよう。

パートナーとの関係に関する20項目に関して因子分析（最尤法、varimax回転）を行い、負荷の絶対値.45以下を除いて最も解釈可能性の高い3因子を抽出した（累積説明率55.1%）。

第1因子は「夫（妻）は良き相談相手である」「夫（妻）と仲が良い」「夫（妻）とは何でも話し合える」を含む8項目からなり、パートナーとの関係性の親密さを示すので「パートナーとの親密さ」（ $\alpha = .90$ ）と命名した。第2因子は「妻（夫）や母親（父親）として以外の生きがいを持っている」「家庭以外に自分自身の個性を活かせる場がある」などの「自分」としての生き方、場を持っているかどうかの4項目からなり「自分の世界」（ $\alpha = .74$ ）と命名した。第3因子は「夫（妻）の喜びは私の喜びだ」「家族の夢の実現を手助けできることが私の生きがいでもある」などの3項目で家族への自分の貢献、家族優先を示すことから「家族優先主義」（ $\alpha = .74$ ）と命名した。

### (2) パートナーとの関係の特徴

パートナーとの関係の3因子について性（夫・妻）、年齢、学歴、妻のライフスタイルにつ

いてt検定, 分散分析による差の検討を行った(岩澤・柏木 2006). その結果, 「パートナーとの親密さ」と「家族優先主義」は夫のほうが妻より有意に高い. 年齢3群では, 妻, 夫ともに差はみられなかった. 「自分の世界」は妻にのみ学歴差が見られ, 中卒群が高卒群, 短大卒群, 大学・院卒群よりも有意に低かった. 「パートナーとの親密さ」では, 妻自身のライフスタイル(働き方)が関係し, 結婚してから働いた経験のない妻は, 他の4群よりもパートナーとの親密さが有意に低い.

それでは, パートナーとの関係は孫との情緒的・物質的資源交換や交流にどう関係してくるのであろうか. 「パートナーとの親密さ」を妻と夫が共に低い低一致群(42組), 妻と夫が共に高い高一一致群(53組), 妻が低く夫が高い不一致群(26組)とした. この3群で「孫から情緒をもらう」「孫に情緒を与える」「孫に金品を与える」「孫とのコミュニケーション」「孫との共行動」の分散分析を行った. その結果, 祖父(夫)と孫との情緒的・物質的資源交換の2因子でのみ差がみられた(表11).

祖母(妻)は, 「孫から情緒・物をもらう」「孫に情緒を与える」「孫に金品を与える」「孫とのコミュニケーション」「孫との共行動」の5因子とも差がみられなかった. 祖父(夫)は「孫に情緒を与える」「孫に金品を与える」の2因子で差があった. パートナーとの親密さ低一致群は高一一致群, 不一致群よりも有意に低い. 不一致群の祖父(夫)はパートナーとの親密さは高く, 祖父(夫)にとっては祖母(妻)との得点の不一致よりも, パートナーとの親密さが高いか低いかということが, 孫との情緒や物を与えることに関連している. パートナーとの親密さが低い祖父(夫)は, 孫に対しても, 情緒を示したり, 物をあげたりすることが少ない.

この結果を岩澤・柏木(既出)の子どもとの情緒的・物質的資源交換とパートナーとの親密さ, 3群と比較してみる. 子どもとのやりとりにおいても夫は「子への経済的援助」の項目で

表11 孫との情緒的・物質的資源交換とパートナーとの親密さ3群の分散分析

|             |       |        | 1 低一致群           | 2 高一一致群          | 3 不一致群           | F値/多重比較    |
|-------------|-------|--------|------------------|------------------|------------------|------------|
| 孫から情緒・物をもらう | 祖母(妻) | 平均(度数) | 1.58 (27)        | 1.78 (36)        | 1.67 (20)        | 0.72       |
|             |       | 標準偏差   | 0.65             | 0.61             | 0.79             |            |
|             | 祖父(夫) | 平均(度数) | 1.47 (33)        | 1.61 (34)        | 1.60 (18)        | 0.63       |
|             |       | 標準偏差   | 1.47             | 0.59             | 0.61             |            |
| 孫に情緒を与える    | 祖母(妻) | 平均(度数) | 2.60 (31)        | 2.79 (42)        | 3.11 (23)        | 2.71       |
|             |       | 標準偏差   | 0.85             | 0.74             | 0.83             |            |
|             | 祖父(夫) | 平均(度数) | <b>1.69</b> (33) | <b>2.24</b> (40) | <b>2.25</b> (18) | 5.42*      |
|             |       | 標準偏差   | 0.77             | 0.73             | 0.89             | 1<2** 1<3* |
| 孫に金品を与える    | 祖母(妻) | 平均(度数) | 3.47 (35)        | 3.58 (47)        | 3.40 (23)        | 1.33       |
|             |       | 標準偏差   | 0.47             | 0.40             | 0.64             |            |
|             | 祖父(夫) | 平均(度数) | <b>2.73</b> (34) | <b>3.29</b> (43) | <b>3.14</b> (22) | 5.54*      |
|             |       | 標準偏差   | 0.83             | 0.68             | 0.72             | 1<2** 1<3* |

\*p < 0.05 \*\*p < 0.01 多重比較欄の数字は各群数字を示す

低一致群が、不一致群や高一一致群より有意に低かった。低一致群の夫は子どもや孫にお金をあげることが少ないことがいえる。

これはなぜだろうか。不一致群というのは夫の親密度に妻とのギャップがあることであり、夫が妻に示す親密度は低一致群よりも高く、高一一致群の夫と同様である。ゆえに、夫が子どもや、孫に示す親和性が子どもには、経済的援助というお金を介して、孫にも、金品を与え、情緒を与えることをしているといえる。

妻はどうであろうか。岩澤・柏木（既出）では、子どもとの交流において「日常的な情緒・物のやりとり」で不一致群が低一致群、高一一致群よりも有意に高い。不一致群の妻は、パートナーとの親密さが低いにもかかわらず、子どもとの「日常的な情緒・物のやりとり」が高い。これは、高木・柏木（2000）で、妻の夫とのコミュニケーションの不全が娘が理解者である感情が高くなっていくように、妻の夫との親密さの不一致が子どもとのやりとりを求めているとは考えられないだろうか。

子どもとのやりとりや交流では、情緒や物のやりとりが経済的なやりとりよりも多く、親子間の手助けは金銭的援助よりも心理的ケアや世話が多い（厚生労働省 既出）。

## 7. 子どもとのやりとり・交流と物理的距離

子どもの性別や子どもとの物理的距離によってやりとりや交流がどのように異なるのだろうか。その2要因の分散分析で比較してみよう。「一番近い存在」の子どもの性別、息子か娘か、さらに物理的距離が同居または子どもが5分以内の距離に住んでいる同居群と5分以上はなれ

表 12 子どもとの物理的距離と性別によるやりとり・交流の比較（分散分析）

|               |      |        | 1         | 2         | 3         | 4         | F 値/多重比較                        |
|---------------|------|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------------------------------|
|               |      |        | 息子同居群     | 息子別居群     | 娘同居群      | 娘別居群      |                                 |
| 日常的な情緒・物のやりとり | 妻の選択 | 平均 (N) | 2.72 (16) | 2.01 (17) | 2.99 (20) | 2.55 (29) | 7.66***<br>3>2*** 1>2**4>2*     |
|               |      | SD     | 0.65      | 0.66      | 0.57      | 0.12      |                                 |
|               | 夫の選択 | 平均 (N) | 2.03 (23) | 1.90 (20) | 2.28 (14) | 2.14 (25) |                                 |
|               |      | SD     | 0.97      | 0.68      | 0.85      | 0.71      |                                 |
| 子からの経済的援助     | 妻の選択 | 平均 (N) | 1.93 (20) | 1.21 (21) | 1.31 (21) | 1.36 (36) | 6.04**<br>1>2** 1>3,4*          |
|               |      | SD     | 0.86      | 0.51      | 0.43      | 0.53      |                                 |
|               | 夫の選択 | 平均 (N) | 1.72 (25) | 1.37 (23) | 1.07 (15) | 1.43 (28) |                                 |
|               |      | SD     | 0.97      | 0.69      | 0.26      | 0.66      |                                 |
| 子への経済的援助      | 妻の選択 | 平均 (N) | 2.91 (22) | 2.02 (21) | 2.44 (24) | 2.19 (37) | 3.73*<br>1>2,4*                 |
|               |      | SD     | 0.92      | 0.84      | 0.98      | 1.02      |                                 |
|               | 夫の選択 | 平均 (N) | 2.57 (27) | 2.04 (23) | 2.47 (17) | 2.06 (27) |                                 |
|               |      | SD     | 1.04      | 0.84      | 1.22      | 0.97      |                                 |
| 子とのコミュニケーション  | 妻の選択 | 平均 (N) | 2.64 (14) | 4.39 (17) | 2.56 (12) | 4.75 (33) | 7.42***<br>4>1,3** 2>3* 2>1+    |
|               |      | SD     | 2.10      | 1.60      | 1.52      | 1.84      |                                 |
|               | 夫の選択 | 平均 (N) | 2.14 (19) | 3.22 (20) | 2.53 (12) | 3.10 (23) |                                 |
|               |      | SD     | 1.38      | 1.58      | 2.13      | 1.45      |                                 |
| 子との共行動        | 妻の選択 | 平均 (N) | 6.83 (18) | 5.17 (18) | 7.28 (18) | 5.68 (39) | 11.44***<br>3>2,4*** 1>2** 1>4* |
|               |      | SD     | 1.21      | 1.59      | 1.17      | 1.23      |                                 |
|               | 夫の選択 | 平均 (N) | 6.02 (24) | 4.83 (23) | 6.50 (14) | 5.50 (26) |                                 |
|               |      | SD     | 1.31      | 1.76      | 1.52      | 1.17      |                                 |

+ p < 0.10 \*p < 0.05 \*\*p < 0.01 \*\*\*p < 0.001 多重比較欄の数字は各群数字を示す

た距離に住んでいる別居群とし、息子同居群、息子別居群、娘同居群、娘別居群の4群で比較した結果が表12である。

妻と「一番近い存在の子ども」のやりとりや交流をみてみよう。「日常的な情緒・物のやりとり」では、息子別居群が他の3群(息子同居群、娘同居群、娘別居群)よりも有意にやりとりが少ない。「子からの経済的援助」では、息子同居群が他の3群(息子別居群、娘同居群、娘別居群)よりも有意にやりとりが多い。「子への経済的援助」では、息子同居群が息子別居群と娘別居群よりも有意に多い。「子とのコミュニケーション」では、娘別居群が息子同居群、娘同居群よりも有意に多い。また、息子別居群が娘同居群よりも有意に多く、息子別居群は息子同居群よりも多い傾向がみられる。「子との共行動」では、息子同居群が息子別居群や娘別居群よりも有意に多く、娘同居群は息子別居群や娘別居群よりも有意に多い。

妻と娘では同居、別居であることが、日常的な情緒・物のやりとりに差を生じさせないが、息子とは、別居で距離が離れることで、そうしたやりとりが少なくなっている。しかし、経済的なやりとりで、「同居している息子」は、妻に対して経済的援助を行っているのが、特徴として挙げられる。その一方で、妻から子への援助も同居している息子に対して多いのは、経済的援助が一方通行ではなく、妻である母から息子への援助に対するお返しの意味合いが息子から妻への援助に含まれるとも考えられる。「子とのコミュニケーション」では、娘、息子共に、別居している子どもの方が、同居している子どもよりもコミュニケーションが多い。その一方で、「子との共行動」では、娘、息子共に、同居している子どもの方が、別居している子どもよりも共行動が多くなっている。これは、コミュニケーションが一緒に行動することだけでなく、「話す」というコミュニケーションを含むからである。ゆえに、同居群では改めて電話等を使ってのコミュニケーションが少ないが、一緒に行動することが少ない別居群は、電話等を使って「話す」コミュニケーションをとることになる。そうしたことが、別居群と同居群が「コミュニケーション」と「共行動」で対照的な結果を示したと考えられる。別居している息子が同居している娘よりもコミュニケーションが多いのも他の項目には見られない特徴として挙げられる。

次に、夫と「一番近い存在の子ども」のやりとりや交流をみてみると、「子からの経済的援助」では、息子同居群が娘同居群よりも有意に多い。「子との共行動」では、息子同居群と娘同居群が息子別居群よりも有意に多い。「日常的な情緒・物のやりとり」「子への経済的援助」「子とのコミュニケーション」には、差はみられなかった。

夫と子どもとの関係では、物理的距離の影響が、妻と子どもとの関係よりも少ないことがわかる。

## 8. まとめ

本研究では、中高年期の妻と夫を対象に、孫との関係(「一番近い存在の孫」の選択や情緒的・物質的資源交換、交流のやりとり)とパートナーとの関係(パートナーとの親密さ)との

関連について検討した。そして子どもとの関係（伝統的家族観の捉え方）から妻（祖母）や夫（祖父）の伝統的家族観やパートナーとの親密さが子どもや孫の好選択にどう関連するのかを考察した。さらに、孫との関係を子どもとのそれ（「一番近い存在の子ども」の選択や情緒的・物質的資源交換、交流のやりとり）と比較し考察した。

「一番近い存在の孫」の選択理由では、「男の子だから」が祖父（夫）のほうが祖母（妻）よりも多かった。「娘の子どもだから」は祖母（妻）が祖父（夫）より有意ではないが、示す割合が多かった。「一番近い存在の子ども」の選択理由でも夫は妻よりも伝統的家族観が強調された理由を選んでおり、夫の子孫の好選択には伝統的家族観でのつながりがみられた。

子どもとの関係では、子どもへの期待、伝統的家族観、子育てへの肯定感情の3因子に分類された。子どもへの期待、子育てへの肯定感情の因子では妻のほうが夫よりも高かった。伝統的家族観の因子は妻と夫の差はみられなかったが、夫の年齢3群の分散分析の結果、夫の年齢高群は年齢低群よりも高く、年齢高群の夫に伝統的家族観の意識が強いことがわかった。

妻（祖母）と夫（祖父）間に見られた子どもや孫の選択理由の差は、はたして妻（祖母）と夫（祖父）という性差だけによるものなのだろうか。その点を、伝統的家族観の得点で妻（祖母）、夫（祖父）それぞれ3群に分け、選択理由を高群と低群とで比較し検討した。その結果、妻も夫も、伝統的家族観の得点が高い群では「イエ」を意識した理由をあげていることがわかった。つまり、夫、妻という性差だけでなく、個々人の伝統的家族観の意識が関連しているといえる。

子どもの価値の変化（柏木、1994）として、子どもの性への好みに変化をもたらしていることがいわれている。“親”の好みの変化…といわれる“親”には、母親、父親の2つの存在がある。本研究では、親の好みといわれる中での、母親と父親の違いを明確にし、かつ、性の好みの背景には、伝統的家族観の意識の違いが関連することを再確認した。

子どもとの情緒的・物質的資源交換、交流のやりとりでは、パートナーとの親密さが夫婦で不一致な群が特徴を示している。それは、妻は、子どもとの日常的なやりとりで、パートナーとのズレを埋めていることである。

孫との情緒的・物質的資源交換、交流のやりとりでは、祖父（夫）のパートナーとの親密さの低一致群が特徴を示している。祖母（妻）との親密さが低い祖父（夫）は孫への情緒を示したり、金品を与えたりすることが少ないことが示された。

子どもや孫との情緒的・物質的資源交換、交流のやりとりでは、妻（祖母）と夫（祖父）でのジェンダー差がみられた。全体的に妻（祖母）が子や孫とのやりとりや交流を頻繁にしていることがわかった。親の年齢（経済力、子や孫の年齢）や学歴（経済力）が子どもや孫とのやりとりに関与していることが、いくつかの点からも明らかになった。

子どもの性だけでなく住距離が妻や夫のやりとりや交流に関連しており、それは、夫よりも妻の方がより関連している結果がみられた。やりとりや交流、コミュニケーションでは別居している息子と妻のそれが少なく、子との共行動でも、妻は同居している娘や息子と一緒に行動

することが多いことがわかった。これらの結果は、夫が子どもとのやりとりや交流を距離に関係なく持っているというより、夫は距離が近くても、子どもとのやりとりや交流が少なく、妻にとって、物理的距離がやりとりや交流に関連していることを明らかにした。

以上のように、中高年期の夫婦のパートナーとの関係の親密さ、パートナーとの親密さのアンバランス、伝統的家族観の意識が子どもや孫の選択理由に影響していた。また、妻や夫の年齢、学歴、ライフスタイル、ひいてはそれが親の経済力として子どもや孫とのやりとり・交流の中身に影響を及ぼしていることが考えられた。子どもの性別、子住居までの時間(同居・別居)によって親との交流、やりとりに違いをもたらしていることもわかった。

子どもの巣立ちからを第2の人生というのであれば、今後、第2の人生のスタートに向けた研究課題はまだまだ、残されている。本研究では、子ども、孫との関係を、情緒的・物質的資源交換や交流の角度から分析してきた。さらに、子どもや孫への親として、祖父母としての感情、期待観、家族観などの観点からの分析も考えていきたい。そのことで、より、現代社会の新しい子、孫との関係の解明に寄与できると考える。

## 文献

- 秋山康子 2002 現代夫婦の性別役割分業観－夫婦内役割分担との関連性－ 日本女子大学 心理相談紀要
- 樋口恵子 2006 祖母力 新水社
- 平山順子 1999 育児期における専業主婦の個人化欲求－経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に－ 発達研究
- 平山順子・柏木恵子 2001 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究, 12 216－227
- 平山順子・柏木恵子 2004 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15 89－100
- 平山順子・田矢幸江・柏木恵子 2003 育児期夫婦の配偶者満足度を規定する要因－妻の就労形態別の検討－ 発達研究, 17 69－85
- 伊藤達也 1994 生活の中の人口学 古今書院
- 岩澤寿美子・柏木恵子 2006 中高年期の夫婦関係と子どもとの関係 1－子どもとの交流を中心に－ 文京学院大学人間学部研究紀要 91－112
- 柏木恵子 1994 子どもの価値・育児の意味－親にとって子どもとは何か？－家庭教育国際セミナー報告論文
- 柏木恵子 2001 子どもという価値 中公新書
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値：今、なぜ子どもを産むか 教育心理学研究, 47 170－179
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究 5(1) 72－83
- 柏木恵子・数井みゆき・大野祥子 1996 結婚・家族観に関する研究(1)～(3) 日本発達心理学会第7回大会発表論文集 240－242
- 高齢社会白書 2004

厚生労働省 2006 国民生活基礎調査

厚生労働省白書 2006

毎日新聞社 人口問題調査会 2005

水野・島谷いずみ 2002 日本における成人期の母娘関係の概念枠組みと測定尺度—都市在住の女性を対象にした分析— 社会心理学研究, 18 25 - 38

目黒依子 1987 個人化する家族 勁草書房

永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究, 16 50 - 57

永久ひさ子・柏木恵子 2001 中年期の母親における「個人としての生き方」への態度 発達研究, 16 69 - 85

日本社会保障・人口問題研究所 第12回出生動向基本調査 2002

小野寺里佳 2005 祖父母が営む世代間関係をどうとらえるか—「個人的選好」としての側面への着目— 国立女性教育会館研究紀要, 9 115 - 120

菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子 2003 父母の子育てへの感情はどのように異なるか—子ども・子育てに対する感情への規定要因の検討— 発達研究, 17 39 - 52

菅原ますみ・詫摩紀子 1997 夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について 季刊 精神科診断学, 8 (2) 155 - 166

高木紀子・柏木恵子 2000 母親と娘の関係—夫との関係を中心に— 発達研究, 15 79 - 94

共働き家族研究所 1996 家計費の分担からみた「男女均等時代の夫婦関係」比較調査 旭化成工業

山田昌弘 1999 現代社会における子育ての「意味」の危機 家族社会学研究, 11 49 - 58

## 付記

1. 本論文は、2004年度文京学院大学大学院修士論文として提出したもの的一部であり、岩澤・柏木（2006）文京学院大学人間学部研究紀要に報告した研究の続きである。
2. 本論文作成にあたり、ご指導頂きました本大学院柏木恵子先生に深く感謝いたします。

(2007.12.12 受理)